

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム ー変容するフランス政治と「国民戦線（FN）」に ついて考える（2）

畑 山 敏 夫

はじめに

1. フランス社会と政治の変容と FN

- （1）「栄光の30年」の終わりと社会と政治の変容ー安定した政治の終焉
- （2）フランスの経済社会の変容と新しい分断の時代へー「二つのフランス」へ
- （3）移民問題の争点化ーFN の躍進を支えたもの
- （4）政治システムの変容ーFN というオルタナティブ

2. 政治家マリーヌ・ルペンを理解するためにールペンの娘に生まれて

- （1）マリーヌ，親に貰いし名はー「共和国の悪魔」の娘として
- （2）弁護士から政治の道へーマリーヌと FN というマイクロコスモス（以上，第50巻第3号）

3. ルペン時代の FNー二つの FN の連続性を理解するために

- （1）周辺の政党からの脱却ー鳴かず飛ばずから突然の躍進へ
- （2）「新右翼」の加入と FN の刷新
- （3）「新右翼」の FN 改革ー党イメージの転換へ
- （4）党の分裂と FN の危機（以上，本号）

3. ルペン時代の FNー二つの FN の連続性を理解するために

2011年1月に開催された党大会で，マリーヌは新党首に選出され，FN は新体制のもとで船出することになった。女性党首であるマリーヌに注目は集まり，FN の「新しさ」が話題になっているが，「マリーヌの FN」の「新しさ」は本質的なものではなくイメージの変化に負うところが大きい。というのは，「マリーヌの FN」は多くの点で「ルペンの FN」を継承しているから

である。ゆえに、両時期のFNの連続性と変化を理解するためには、「ルベンのFN」について基本的なことを理解しておく必要がある。本章では、二つのFNの連続性を理解することを目的に、ルベン期のFNについて必要限りで振り返ってみたい(1)。

「ルベンのFN」は大雑把には3つの時期に区分できる。第1期は、1972年の結党から1983-4年の選挙で躍進するまでの時期。極右諸派の結集体として結成されたFNが、対立と内紛を繰り返すなかで周辺的存在にとどまっていた時期である。

第2期は、1983-4年の選挙での躍進から1990年末までの時期である。FNが泡沫政党から脱却する時期であり、政党党システムへの参入と定着を受けて、党の組織や理念が整備され、FNの基本的方向性が確立された時期である。

第3期は、1999年1月の分裂から今日までの時期である。分裂以降、マリヌがFNの中心的存在になっていき、その延長線上に2011年1月に新党首に就任した。FNは「マリヌ効果」もあり、新たな飛躍の局面を迎えている(2)。

本章では、第1期を簡単に振り返り、FNの連続性と変化の観点から重要である第2期を重点的に扱うことにする(第3期は第4章以降で扱われる)。

(1) 周辺の政党からの脱却—鳴かず飛ばずから突然の躍進へ 極右政党の結集組織から「ルベンのFN」へ

FNは、典型的な極右政党として1972年に結成された。それは、1960年代末にピークに達する左翼の学生運動や極左政党の台頭に対抗して、極右の活動家たちによって結成されたという点で紛れもなく極右政党であった。ネオ・ファシストの極小集団であった「新秩序(l'Ordre nouveau)」(1969年11月結成)が、学生中心の過激な運動という限界を突破すること、「ナショナリスト的・ポピュリスト的革命」に向かって選挙という合法的手段を利用することを目的に結成した政党がFNであった(3)。

68年5月にピークに達する反体制的政治運動のなかで、危機感を抱いた極右陣営は対抗運動の構築に乗り出した。実践的な政治活動の分野、選挙を中

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(2)

心とした制度領域での対抗運動がFNであったとすれば、思想領域での左翼支配への対抗運動が極右系知識人たちによって結成された「新右翼(Nouvelle Droite=ND)」であった(4)。

さて、極右の合法的・実践的領域での対抗運動であったFNは、1973年の国民議会選挙に向けて結成された。その際に、選挙と議会の活動に有用な人物としてルペンが党首に祭り上げられることになった。その理由の一つは、彼のキャリアにあった。ルペンは、アルジェリア独立反対運動、プジャード運動、1965年大統領選挙での極右統一候補ティクシエ＝ヴィニャンクルの選挙運動と、戦後フランスの主要な極右運動に一貫して関わってきた。特に、1963年にはプジャード運動から国民議会議員に当選して議会政治を経験したが、ルペンの知名度と、議会政治に乗り出すFNにとって彼の議員としての経験が、FNの党首に適役だと評価されたのである。

ただ、選挙と議会は革命に至る一つの手段にすぎないとする極右活動家たちにとって、ルペンは合法的戦略に必要な「ピースの一つ」に過ぎなかった【Dézé 2012: 31-38】。つまり、ルペンはシンボル、あるいは広告塔的役割を期待されていたに過ぎなかった。FNは極右の諸潮流の寄り合い所帯であり、そのバランスの上にルペンは党首を務めていたに過ぎなかった。

その意味で、発足したばかりのFNは、まだ「ルペンのFN」ではなかった。1970年代のFNは内部闘争と分裂に明け暮れ、ルペンは形の上では党首であったが指導権を確立するには程遠かった。党内には議会政治に参入することで政治的影響力の拡大を目指すルペン支持派と、選挙と議会を影響力拡大の単なる手段と考え、議会外での活動を重視する急進派との確執がつづき、党内の結束は難しかった〔畑山 2007: 3-4〕。

結成から続く党内の混乱状況にもかかわらず、FNの結成は極右の歴史においては画期的なことであった。戦後の極右運動は王党派やカトリック伝統主義派、ペタン派、ファシスト、急進的學生運動などの多様な諸潮流が割拠してきた。そのような諸勢力が一つの組織に纏まるということは不可能だと思われてきたが、それが実現したのである。また、実力闘争だけではなく、選挙と議会活動に参入することを党内の諸潮流が受容したことも画期的なことであった〔Raynaud 2016: 78-79〕。

だが、急進的言動を繰り返し、党内対立と分裂騒ぎに明け暮れる政党が有権者に支持されるはずもなく、結成からの約10年間は選挙に挑むが泡沫状態がつづいた。現実政治のなかで FN は周縁的存在にとどまっていた（表 3 - 2 参照）。

表 3 - 1 大統領・国民議会・欧州議会・地域圏議会選挙でのルペンと FN の得票率（フランス本土）（％）

1973	国民議会	0.44	2002	大統領（第 1 回）	17.19
1974	大統領	0.76		（第 2 回）	18.0
1978	国民議会	0.30		国民議会	11.34
1981	国民議会	0.17	2004	欧州議会	9.97
1984	欧州議会	11.07		地域圏	14.66
1986	国民議会	9.89	2007	大統領	10.69
	地域圏	9.66		国民議会	4.38
1988	大統領	14.61	2010	欧州議会	6.67
	国民議会	9.79	2012	地域圏	11.74
1989	欧州議会	11.8		大統領	17.9
1992	地域圏	13.75		国民議会	13.6
1993	国民議会	12.72	2014	欧州議会	24.86
1994	欧州議会	10.61		地域圏	27.7
1995	大統領	15.26	2017	大統領（第 1 回）	21.30
1997	国民議会	15.22		（第 2 回）	33.90
1998	地域圏	15.34		国民議会	13.20
1999	欧州議会	5.86			

国民議会、地域圏議会、欧州議会の各選挙は第 1 回投票の結果である。

泡沫であった理由は、党の内紛だけではなかった。1970年代の FN は、有権者の心に響くテーマを見出せなかった。FN は反共産主義をイデオロギーの核とし、ある場合は植民地へのノスタルジーを、別の場合は強硬なカトリック信仰を宣伝材料にしていた。また、経済領域では英国のサッチャー首相や米国のレーガン大統領と同様の新自由主義路線を採用し、市場を重視して国家の役割を縮小することを主張していた。当時の FN は、中小企業経営者や職人、保守的ブルジョワを主要な支持基盤にしており、保守層を意識した政

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(2)

治的スタンスを基本的としていた [Crépon 2016 : 29-30, La gauche forte 2014 : 15]。

広範な有権者の関心に応える宣伝扇動ができず、周辺的存在に閉じ込められていた FN であったが、やがて、そのような状態から脱却する機会が訪れる。1983年から84年にかけて、FN は突然に躍進の局面に入るが、それは偶然ではなく、結党から10年を経て、ようやく躍進の条件が整ったことによる。

その客観的条件は第1章で概観したが、党固有の主体的条件としては、党内で大きな影響力を持っていた急進派のリーダー的存在であった F・デュプラ (François Duprat) が、1978年3月18日に自動車の爆発によって死亡したことが重要であった。急進的活動家・幹部にとって求心力の核であったデュプラの死は党内の力関係を大きく変えることになり、急進派の追放や離党が相次いだ。他方で、ルペンに有利な条件として、彼に協力的な極右運動の一派である「ソリダリスト (Solidaristes)」が1977年に大挙として FN に加入してきたことで、党内の勢力バランスは大きく変化した(5)。今や実質的にルペンの指導権が確立され、「ルペンの FN」が名実ともに実現した [Dézé 2012 : 68-71]。

ルペン支配の確立は、選挙を通じた政党システムへの参入に集中する体制が整ったことを意味していた。党内の急進派の影響力が弱体化し、党のイメージが改善されたことが選挙での躍進につながった [Dézé 2014 : 75-77] (6)。

反移民言説への反響

結党から FN が展開してきた反共産主義と新自由主義を核にした言説は、支持拡大の跳躍台にはならなかった。FN に予想外の成功をもたらしたのは、ナショナリズムと人種主義、排外主義を接合した言説、すなわち、国民共同体の正規メンバーの利益とアイデンティティを優先し、国民共同体にとって異質な外国人の存在を敵視し、当時のフランスが抱えていた失業や犯罪の問題を移民によって説明する言説であった。移民を取り巻く環境が厳しくなるなかで、FN は移民問題という有権者を動員できるテーマをついに手に入れたのである。

と言っても、FN の「十八番」となるテーマは突然に掲げられたわけでは

なかった。1973年には「失業の阻止、仕事をフランス人に」と赤字で大書されたポスターを作成しており、発足時からFNは、フランスの経済社会にとって重要な問題として移民問題を位置付けていた。移民問題を核とした民衆層へのプロパガンダは、既に始まっていたのである [Igounet 2016 : 36]。

その延長線上に、1978年の国民議会選挙でFNは初めて移民の存在に焦点を当て、「百万人の失業者、百万人の多すぎる移民、フランスとフランス人第一」というポスターを作成して選挙キャンペーンを展開した。その選挙では効果を発揮しなかったが、1983年、パリ近郊の自治体ドルー（Dreux）で実施された自治体議会選挙でFNの躍進劇は幕を開いた（7）。

その時期は、経済成長の時代が終焉し、移民、失業、犯罪の増加といったフランス社会が抱える問題が深刻化していた。失業状態での滞在や西欧的核家族のイメージを超えた多子家族に対して、「福祉依存の移民」といったスティグマが押し付けられた [宮島 2016 : 51-52]。移民を敵として設定し、社会に分断線を引く、FNのポピュリズムの手法が成功する状況が生まれていたのである。移民の存在によってフランスが抱えている困難を説明し、大量の移民をフランスに導入した責任者である既成政党・政治家、経営者といったエリートを敵に回し、糾弾する言説が説得力を発揮し、有権者をFNへと動員した。

そのようなポピュリズムの手法は党首ルペンの得意とするものであった。ルペンは天性のアジテーターで、即興の演説で聴衆を沸かせ、楽しませる能力に長けていた。少々品性に欠け、時には失言もあるが、分かりやすい言葉、シンプルな解決法、政敵への中傷を散りばめた演説を得意とするルペンは、もともとポピュリストのスタイルを身に着けていたのである。民衆の側に立って移民問題という「タブー」に挑戦し、既成政党と政治家によってないがしろにされていると感じている人々の怒りを結晶させるルペンの手法は、FNの躍進にとって大いなる武器となった（8）

治安や失業の問題と結びつけた移民問題の争点はマリーヌの下でも健在で、イスラムとテロといった反移民言説の最新バージョンも組み込んで威力を発揮し続けている。

「100万人の失業者、100万人の多すぎる移民」

1970年代から1980年代の初頭にかけて各種選挙に参加したFNは惨敗の連続であった。ところが、1983年、パリ近郊の都市ドルーの市議会選挙第1回投票でFNは16.72%を得票する。泡沫政党であったFNにとって画期的な得票であり、新しい局面が開かれた瞬間であった。

ドルーで突破口が開かれたのは、全くの偶然ではなかった。ドルーでは、ルペンの片腕であるJ-P・スティルボワ(Jean-Pierre Stirbois)が拠点づくりに勤しんできた地域であったからである。ただ、地道な組織活動が奏功したことは否定できないが、成功の最大の要因は移民問題に焦点を当てたFNのキャンペーンにあった。

FNは、前述のように、1978年の国民議会選挙で「100万人の失業者、100万人の多すぎる移民」というスローガンを使い、国民に広がっていた移民に対する過剰感に訴えていたが、同時に、フランス人を移民より優先する「フランス人優先(Priorité aux Français)」というスローガンも掲げていた[Simon 2011: 165-166]。排外主義とナショナリズムを接合した言説は、FNのプロパガンダに組み込まれていた。

そのことを証明したのが、ドルーでの選挙であった。ドルーはパリ近郊に位置しているが、不況と失業者の増加、治安の悪化に苦しみ、多くの移民を抱える自治体であった。そこで、大量の移民を告発するFNの言説は労働者の多いドルーで大きな反響を呼び起こし、1983年3月の市議会議員選挙でFNの候補者リストは異例の得票を獲得した(11.26%)。

同選挙戦では、「200万人の失業者、200万人の多すぎる移民。フランス人とフランス第一」というポスターが掲げられた。移民の増加が犯罪の増大をもたらし、移民がフランス人から雇用を奪っているという言説が威力を発揮し、「フランス第一」という自国民中心主義的な煽動も行なわれていた[Igounet 2014: 139]。その勢いは止まらず、1984年の欧州議会選挙でも10.95%を得票し、FNは国政選挙でも勢いを証明した。

FNは有権者の抱えている政治や社会に対する不安や不満を移民の存在で説明し、移民を大量に受け入れてきた歴代の政権や既成政党・政治家、経営者の責任を告発した。自分の利益のために民衆を苦しめるエリートたちと義

性者である民衆という二分法、そのような典型的なポピュリズムの手法が駆使されている。移民問題を利用した異議申し立てのポピュリズムの成功は、FNに極右政党から脱却する可能性を開いた。

ただ、FNの躍進は移民問題の利用だけでは説明できない。1980年代初頭に起きた政権交代がFNに有利なもう一つの条件をもたらした。1981年の大統領選挙で左翼側が勝利してミッテラン政権が就任するが、左翼政権の成立への危機感や左翼政権に有効に対抗できないことに不満を感じる保守支持者の一部がFNに支持を寄せた。FN側も新自由主義的な経済政策を掲げ保守支持者の獲得に努めた〔畑山 2007：7〕。

従来の極右支持層に、移民問題に敏感な排外主義的・自国民中心主義的な有権者と保守支持層のなかの不満分子が合流することで、FNへの支持は膨らんでいった。

FN 支持層の「プロレタリア化」

移民問題を梃子に政党システムに参入・定着していったFNであるが、徐々に支持層に変化が見られた。1984年の欧州議会選挙で保守支持層から流入した旧中間層を中心とした有権者（保守政党支持で熱心なカトリック信者、相対的に恵まれた生活水準、左翼政権の成立に危機感を抱いた有権者）が次第に保守陣営へと回帰し、民衆層の割合が増加していった。1990年代年には労働者を中心として事務職員、失業者などの民衆層が支持層の中心を占めるようになっていった。その現象は「労働者ルベン主義」と呼ばれ、支持基盤の「プロレタリア化」が顕著になっていった〔Mayer 2012：153, Delwit：2012：24〕。

1990年代に進行するFN支持層の「プロレタリア化」を大統領選挙での投票、および、投票意向の数字から確認しておこう。1988年の大統領選挙から2002年の大統領選挙までのルベンへの投票結果、2012年の大統領選挙に向けた調査でのマリヌへの投票意向のデータについて、「プロレタリア化」と関連する結果、すなわち、職業と学歴についてのデータを紹介しておこう（表3-2参照）。

職業についてであるが、FNの全体的な得票率をコンスタントに超えてい

マリヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (2)

るのは事務従事者と労働者である。事務従事者は1998年の大統領選挙で FN 全体の得票15%を下回った (14%) ことを除いて、以降は恒常的に上回っている。労働者では、すべての大統領選挙で党の得票率を大幅に上回っている。また、学歴についてみると、教育歴の短かさと FN への支持が相関していることは明瞭である。選挙における得票の増減に左右されてはいるが、1980年代後半から、FN が民衆的な有権者の支持に一貫して支えられていることが分かる。

表 3-2 大統領選挙第 1 回投票における FN 候補への投票者 (意向者) の社会職業的性格 (1988-2012年) (%)

	1998年	1995年	2002年	2007年	2012年(投票意向)
全体	15	15	17	11	15
職業					
農業者	10	10	22	10	—
経営者	19	19	22	10	24
知的専門職	14	4	13	7	5
中間管理職	15	14	11	8	11
事務従事者	14	18	22	12	15
労働者	17	21	23	16	28
学歴					
初等	15	17	24	13	22
初等上級	17	20	21	13	20
バカロレア	13	12	15	8	17
バカロレア + 2	10	13	11	3	13
高等	9	4	7	4	5

世論調査は、CEVIPOF (1988年, 1995年), panel électoral français (2002年・2007年の vague 1), TriElec 調査 (2011年 7 月-10 段階で 5-10 以上の蓋然性でマリヌに投票する意向の有権者)。失業者と退職者は失業と退職前の職業で分類。ただし、1988-2002年と2011年は統計の方法が違うので直接には比較できない。

出典: [Mayer 2012: 150]

1984年から1997年にかけての FN への投票動機も、支持層の変化を反映していた。1984年には24%であった「失業」が1997年には75%に増加し、「移民」や「治安」と肩を並べている (1997年で「治安」が66%, 「移民」が72%)

[Delwit 2012: 26]。排外主義的で秩序指向で雇用問題に敏感な有権者、比較的民衆層に多いタイプの有権者が大半として FN に投票していると考え

られる。

FNが民衆層で支持を伸ばす傾向はどのように解釈すべきだろうか。それは、1970年代後半から進行してきた経済社会の構造的変化と無縁ではないだろう。グローバル化と新自由主義化の時代のなかで、保守政党は当然のこととして、これまで民衆の側に立って闘ってきた共産党や労働組合は抵抗力を失ってきた。典型的には社会党であるが、かつて社会の変革を訴えていた社会党も、政権政党化するなかで現実主義化し、共産党も含めて左翼勢力は必ずしも民衆層の味方ではなくなっていた〔Goodliffe 2015: 116-119〕。国際競争力の強化や経済危機からの脱却を優先して民衆層を見捨てているように思える左翼と保守の既成政党を離れて、民衆層の一部はFNに向かった(9)。

FNの側も、そのような状況に的確に対応した。これまでFNは、「小さな政府」や市場中心主義など新自由主義を基調とした理念や政策を掲げてきたが、次第に国家介入や保護主義を肯定する方向に転換した。新自由主義への批判と反グローバリズム・反EUの立場に転じることでFNは国民の生活と安全、雇用、アイデンティティを守る「護民官」として、自己を演出することが可能になった。そのような党の方向転換を正統化・理論化したのが、1980年代半ばから相次いでFNに流入してきた極右系知識人たちであった。

(2) 「新右翼」の加入とFNの刷新

「新右翼」とは何か

FNは周辺の政党から脱却することに成功したが、理論や組織は泡沫政党時代のままであった。選挙で躍進はしたものの、党はルペンを中心とした少数の幹部で運営され、地方組織はほとんど未整備で、党員や活動家は非常に少なかった。つまり、選挙で躍進を遂げたものの、資金や人材に事欠いており、いわば、FNは政党の体をなしていなかったのである。そのようなときに、党組織の整備・充実、独自の理論と戦略、安定的な党財政、有能な人材を備えた政党へとFNを脱皮させるという課題を担ったのが、1980年代半ば以降にFNに流入してきた「新右翼 (Nouvelle droite)」と呼ばれる極右系の知識人たちであった。

彼らのFNへの加入を抜きにFNの変化を語ることはできないし、現在の

マリヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (2)

「マリヌの FN」のイデオロギーや組織の基本は彼らによって構築されたといっても過言ではない [Dézé 2012 : 128]。

日本ではあまり知られていないので、「新右翼」と呼ばれる極右系の知識人たちについて手短かに解説しておこう。1968年5月に急進左翼の政治運動は頂点を迎えるが、そのような左からの運動の高揚に対抗すべく1969年に極右系知識人 A・ド・ブノワ (Alain de Benoist) を中心に「ヨーロッパ文明調査研究集団 (= GRECE)」が結成される。その団体に所属する極右系知識人たちが「新右翼」と呼ばれた。結成の目的は時代に合致した新しい右翼理論を構築して、左翼側から知的ヘゲモニーを奪還することにあった。つまり、現実政治の領域で極右の起死回生のプロジェクトが FN であったとすれば、思想やイデオロギーの領域でのそれが「新右翼」であったと言える。

戦後の極右勢力は現実政治でも周辺的な存在であったが、ジャーナリズムや知識人の間でも左翼が知的優位性を誇っていた。特に、1968年の「5月革命」を頂点とする学生や労働者の反乱のなかで、運動と思想の両面で主導権は完全に左翼側に握られていた。そのような状況に対して、極右系の知識人たちは思想の領域で反転攻勢に立ち上がった。

彼らは、キリスト教の布教以前のインド＝ヨーロッパ語族の文明を理想の原点として、キリスト教の影響を受けないギリシア・ローマ時代の価値や文化の復権を唱え、ユダヤ・キリスト教の画一性を否定して多様性 (diversité) を称揚するなど、多くの独創的な発想や思想を掲げていた。それにはここで立ち入らないが、そのようなユニークな発想や思想をもとに極右思想の刷新に取り組んだことから「新右翼」という呼称が与えられたのである (10)。

ブノワたちは思想的・イデオロギー的次元に特化した、その意味で政治的実践から超越した形而上学的で非実践的な活動を重視していたが、「新右翼」のなかには、現実政治での影響力の強化を重視するメンバーが存在していた。彼らは「クラブ・ド・ロルロージュ (Club de l'Horloge = CDH)」(1985年に「カルフル・デュ・ロルロージュ」に改名) という分派を結成して、保守政治家や高級官僚、経営者、専門家、ジャーナリスト、知識人といった社会的影響力のある社会層に食い込み、思想・イデオロギー面で感化することで現実政治に影響力を行使することを狙っていた。

そのような実践重視の姿勢が、FNを通じて現実政治に関わっていくという選択をCDHの知識人に選択させ、FNを「思想の実験室」にするために大挙として加入するのであった。

1990年代、冷戦の終焉が象徴しているように時代は大きな変化を見せ、その意味で、FNもイデオロギーの刷新を必要としていた。1980年代末から国際政治は急速に変化し、戦後政治を支配してきた東西冷戦の時代は終焉を迎えた。これまで反共を党のアイデンティティの中核に据えてきたFNは、イデオロギーとプロパガンダの重要な核を失うことになった。その空白を埋めたのが、「新右翼」の知識人たちによる党の近代化・組織化とイデオロギーの再定義、戦略の再考の作業であった。

「新右翼」、FNへ

CDHからFNに加入した代表的人物がB・メグレ (Bruno Mégret) であった。エリート養成教育機関 (グラン・ゼコール) の1つである「国立行政学院 (ENA)」の出身でエリート官庁「コンセイユ・デタ (国務院)」に務める高級官僚を父として1949年に生まれたメグレは、彼自身も理系のエリート養成教育機関「エコール・ポリテクニク (国立理工高等学校)」, 国立土木大学校を経て、カリフォルニア大学バークレー校に学び、卒業後はプラン総局や海外協力省などの高級官僚として勤務してきた。いわば、典型的なエリートのキャリアを辿ってきた人物であった [Lecœur 2007: 201-202]。

メグレが政治に関わったのは官僚時代であった。ノンポリの学生時代を経て、プラン総局の時代にCDHに勧誘され、政治の世界に足を踏み入れた。彼は、現実政治に影響を与えることを期して共和国連合 (RPR) から共和党へと保守政党を渡り歩き、やがて、FNに辿りつくことになった (11)。J・Y・ルガル (Jean-Yves Le Gallou), P・ヴィアル (Pierre Vial) といったメグレのCDHの同志たちも、エリート養成教育機関を卒業して内務省、大臣官房などで高級官僚として勤務した経歴をもっていたが、メグレと同じように次々とFNに入党してきた [畑山 2007: 124-125]。

1985年にFNに加わったメグレは、すぐにFN内で頭角を現した。1988年11月には全国書記長と並ぶ党の要職である「全国代表幹事 (Délégué

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(2)

général)」に就任している。グラン・ゼコールの出身者が多く、アカデミズムと高級官僚の世界につながり、知的威信と専門能力を備えた彼らは、FNにとっては貴重な人材であった。

メグレ派の拠点としていた機関の一つである「全国研修学校 (l'Institut national de formation)」が作成した内部文章「FNの戦略」には、メグレたちの政治戦略と党刷新についての考え方が明確に表現されていた [Igounet 2014 : 213]。

そこでは、知識人の集団らしく、知的側面を中心にFNのイメージ改善が説かれていた。FNに政治的責任を果たす能力があること、知的側面を備えていること、政治運動であると同時に思想運動でもあること、技術的なものも含めてあらゆる問題に対して自己の立場を表明できること、自治体運営が首尾よくできること、高度に知的な内容の書籍を出版できることといった課題の重要性が説かれている。また、政界での孤立を打開するために影響力を持つ社会層や世論の仲介者たち、とりわけ、知識人や大学人、経済人や専門家たちに浸透すること、社会のトップクラスの支配層に向けた積極的な広報活動を展開すると同時に、市民社会のなかに多くの種類のサークルやアソシエーションのネットワークを構築・活用することの重要性が提言されている。

彼らのイニシアティブのもと、理論武装が施され、その成果が党員や幹部に注入され、外部に対する知的影響力を拡大するという課題が追求された。その拠点であったのが全国代表部のもとに設置された「科学評議会 (Le Centre scientifique)」「教育・宣伝研究所 (Le Centre d'études et d'argumentaires)」「全国研修学校」といった機関であった [Igounet 2014 : 214]。

そのような組織基盤を整えることで、メグレたちはFNの刷新に取り組んだのだろうか。彼らは、FNを「まともな」政党に変え、「信頼される」政党へと脱皮させ、ゆくゆくは政権に参画する政党へと育てることを望んでいた。そのためには、暴力的で急進的な極右政党のイメージを払拭することが急務の課題であった (12)。

1990年代に、メグレたちは組織の整備・充実と理論武装と知的権威づけに貢献した。その結果、メグレたちは党内で着実に威信と評価を高め、その影響力を強化し、そのリーダー格であるメグレはルペンに次ぐNO. 2へと党

のヒエラルキーを昇りつめていった。ただ、そのことが、1998-1999年の分裂を引き起こすことになった。

メグレたちの党刷新の到達目標党は、国民復興のプロジェクトを遂行するために国政を掌握することである。そのためには、高度な知的・専門的能力を備えた集団にFNを変え、知的・政策的な影響力を強化することで、政権担当可能な政党として認知されることが必要であった。そのような認識と方向性は、「マリーヌのFN」にも基本的に継承されている。

(3) 「新右翼」のFN改革—党イメージの転換へ

(i) 始まっていた脱極右政党化—「脱悪魔化」と「普通の政党化」

極右政党からの脱却へ

FNは変わらなければならない。まずは、FNを異議申し立ての政党であるというイメージから脱却させることが必要であるというのがメグレたちの基本的認識であった。FNが政権に到達するためには、保守勢力との連携が不可避で、そのためには保守勢力からも受容される政党へとイメージ転換が必要であったからである。保守勢力と協力が可能な政党にFNを変えること、そのためには、より民主的な党運営と家業的体質の払拭が必要であり、党を「ノーマル化」することが急務であった[Fourest et Venner 2011 : 113-114]。

つまり、メグレたちは、急進的な異議申し立て政党、ルペンの個人商店的政党であるFNから、明確な政策理念と安定した組織を備えた政党、有権者から信頼を寄せられ、政権への参加を認められる政党への脱皮を追求したのである。

「脱極右政党化」は「普通の政党」であることの前提であった。例えば、急進的・批判的言説を弄するだけではなく、実務能力や政策遂行能力を備えていることを示すことは重要であった。そのためには、地方組織を充実させ、地方選挙を制することで自治体の政権を掌握することが重視された。その意味で、1995年市町村議会選挙で、ヴィトロール (Vitrolles)、オランジュ (Orange)、マリニャヌ (Marignane)、トゥーロン (Toulon) の4自治体で市政を掌握したことは、FNにとって画期的なことであった。メグレたちは、4つの市政を新しいFNの「ショーウインドー」にすることを望んで

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(2)

いた [Fourest et Venner 2011 : 113] (13)。

「脱極右政党化」の課題にとって、実務的で現実主義的な政党であるというイメージを与えることと同時に、急進的で暴力的なイメージを払拭することが重要であった。後者の課題に向けた戦略的取り組みが「脱悪魔化(dédiabolisation)」であった。例えば、1992年の地域圏議会選挙に際して、FNに絡みついていた反社会的といったイメージを払拭するために、従来の急進的で強硬な言説を変え、信頼される政策プログラムを提示することが、メグレたちによって進められた [Igounet 2014 : 236]。

同様に、1988年の大統領選挙でも「脱悪魔化」が取り組まれた。選挙キャンペーン本部が設置されると、そのトップにメグレが就任し、「脱悪魔化」の具体的方針を設定して、研修、組織化、教義、イデオロギーと多様な領域でFNの刷新に乗り出した [Igounet 2014 : 182]。

後にマリーヌの下で「脱悪魔化」が本格的に取り組まれるが、それは既にメグレたちが着手していた課題であった。FNを「脱極右化」という目標を掲げて、イメージ転換を重視するという発想はメグレたちに由来していた。その戦略的方法である「脱悪魔化」について、もう少し詳しく見てみよう。

「新右翼」の「脱悪魔化」戦略

「脱悪魔化」は、FNに纏わりついている極右イメージを転換することであった。その意味で、それはビジュアルなものから言説にまで及ぶ総合的な取り組みであった。ビジュアルな面での具体的な例としては、党首ルペンのイメージ・チェンジが図られた。ポスターのルペンがソフトで親しみやすい人物に見える工夫が施された。それまで、ネクタイとスーツでいかめしい顔で映っていたが、例えば、1988年に制作されたポスターでは若々しく見せるために、髪形や髪の毛の色に工夫がこらされていた。極右の伝統的なリーダーから、「モダンな」政治指導者へのイメージ転換が意図されていた [Dézé 2012 : 77-78]。

ルペンのイメージをソフト化して、若々しく親しみやすく、「近代的な」リーダーというイメージづくりは、2002年の大統領選挙でもルペンのポス

ターで試みられているし、2007年の大統領選挙では若い移民系の女性のポスターへの登用によって党イメージの柔軟で寛容な党というイメージ造りが図られている [Dézé 2012 : 138-139]。

「脱悪魔化」は言説にも及んでいた。同じ内容を表現する場合でも、世論の抵抗や反発を回避するために、FNの思想や言説が穏健に感じられるように婉曲化や穏便化の工夫が施された。典型的な例が移民をめぐる言説であった。FNは移民問題を告発することで躍進しただけに、排外主義的で外国人嫌いの政党という批判を免れなかった。そのような非難を回避することは急務であり、そのために開発されたのが「自国民優先 (préférence nationale)」という概念であった。

社会保障や雇用などの面で、外国人よりも国民を優先するという主張は、国民共同体の非正規メンバーと正規メンバーの区別によって正当化された。その言説は、事実上は外国人への差別的対応を正当化するものであったが、人種差別や排外主義という非難や法律への抵触を回避する意図をもっていた [Dézé 2012 : 90-91]。そのような論法は「反フランス人の人種主義 (racisme anti-française)」という言葉によっても駆使されている。フランスの地でありながら、外国人によってフランス人の安全が脅かされ、外国人が犯罪の温床となり、フランス人が犠牲になっている現実が告発されている [Fersan 1997]。

低家賃社会住宅は外国人入居者で溢れ、多子の外国人が児童手当、家族手当を給付され、企業や街角で外国人労働者が働いている現実、外国人がフランス人以上に優遇されてフランス人が差別されている現実の是正を彼らは訴えていた（「自国民優先」については、イデオロギーや言説の整備に関する節で詳説）。

差別的で排外主義的イメージの緩和を狙った言説として、FNは犯罪のテーマも活用していた。1990年前後には移民と犯罪を直結するプロパガンダに力が入れられ、「移民＝治安の悪化 FNに投票せよ」というポスターが貼りだされた。1989年10月31日にアヴィニョンでマグレブ系移民による殺人事件が起きると、FNは被害者（フランソワーズ・コンヴィエ）を移民問題による殉教者とするポスターまで制作して、大々的に喧伝した [Dézé 2012 :

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(2)

95-96]。FNは移民に犯罪の責任を強調することで、反移民的立場を正当化すると同時に排外主義的で差別的なイメージの緩和するという手法を駆使した。

また、反移民的立場の正当化は、移民一般ではなくイスラムを問題にすることでも行われた。1990年に、FNは「ルペンか侵略(l'invasion)か」というポスターを制作しているが、はっきりと名指してはいないが「侵略者」はムスリムを意味していた。1989年には、「20年後には、確実に、フランスはイスラム共和国になる」というポスターを制作されている。イスラムがフランスにとって現実の脅威であると同時に、文明論的・人口論的な脅威であると主張することで、FNの反移民的立場が正当化されている[Dézé 2012: 97]。

旧植民地のマグレブ諸国を中心に大量の移民が流入し、ムスリム系移民の割合が高いのは確かであった。そのような現実を捉えてFNは、西欧文明とは異質な大量のムスリム移民の流入を「侵略」に例え、多産なムスリムによってキリスト教で白人のフランス人がマイノリティに追いやられると脅して、国民のなかに存在する人口論的・文明論的不安を刺激する立論を展開していた。

以上のように、移民問題についてのプロパガンダでも、メグレたちは、FNの言説や思想への抵抗感を緩和するという「脱悪魔化」の戦略を展開していた。

さて、FNの刷新に向けたイメージ転換の戦略を見てきたが、次に、「まともな」政党を目指すメグレたちの取り組みは、政党としての体裁を整えることに向けられていた。そのエネルギーは党組織とイデオロギー、政策の整備・充実に注がれた。

(ii) 「新右翼」、党組織の整備に乗り出す

効率的な戦争マシンへ

2010年9月6日に開催された全国評議会で、マリーヌは「効率的でプロ化した組織」「刷新され、開放的で、効率的な政党」、権力獲得に向けた「本当の戦争マシン」としてのFNについて言及した[Amjahad et Jadot 2012:

57-58]。マリヌが求めている党の姿は、基本的には1990年代からメグレたちによって追い求められてきたものであった。

1980年代前半に躍進を遂げたFNであったが、政党組織の整備は大きく立ち遅れていた。端的に言えば、FNは家族と限られた取り巻きに囲まれたルペンの小さな王国であった。党組織は存在していたが党内民主主義は機能せず、権威主義的な党首が独断で決定を下していた。つまり、FNは近代的政党の内実を伴っていなかった [Igounet 2014 : 306-307]。

また、FNは組織活動の実体も欠いていた。党の首脳部は、幹部を養成し、党の歴史や教義の基本を共有するためには支部活動が必要なことは理解していた。だが、1983-4年の時点では党組織は未整備な状況であった。県連や地方組織が存在しないか、存在しても実体のない状態であり、1985年の時点でも、党の仕事の95%はボランティアによって処理されていた。1989年の市町村議会選挙の時点でも多くの県で候補者の擁立ができず、組織強化の必要性が痛感されていた [Dćzć 2012 : 106, Igounet 2014 : 164]。

そのような組織化の課題に応えたのが、メグレたちであった。彼らは理論やイデオロギーの整備とともに、党の組織化の必要性も十分に理解していた。

メグレたちは、FNを効率的な選挙マシンに変えること、そのためにはFNをプロフェッショナル化する必要性について自覚していた。日本で右翼といえ、軍艦マーチを鳴らし街宣車で走り回る民族系団体が想起される。組織も未整備で、政策も貧弱な運動の実態が目につかぶだろう。

フランスの場合も、極右政党は類似したレベルにとどまってきた。だが、メグレたちの努力によって、フランスの国民戦線は日本の右翼団体とはかけ離れた堅実で充実した党組織を備えることになった。党首ルペンのもと、副党首（4名）と財務担当者、政治局（40名）、中央委員会（120名）、全国評議会（政治局員、中央委員会委員、欧州議会議員、地域圏議会議員、県連書記で構成）といった党の中央組織と、地域圏や県レベルの地方組織も整備され、中央から地方まで党のヒエラルキー的組織体制が整えられた [Amjahad et Jadot 2012 : 61-62]。

組織化の進展は、FNにとって重要な意味をもっていた。極右の諸潮流の結集体として発足したFNが長期にわたって存続するためには、党の組織化

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(2)

と政策の体系化は避けて通れない課題であったからである。そのことはオランダにおける2つの右翼ポピュリスト政党、G・ウィルデルス(Geert Wilders)の「自由党」とL・フェルドンク(Lita Verdonk)の「オランダの誇り」を比較してみると理解できる。フェルドンクが党の組織化と政策の体系化に関心が薄かったのとは対照的に、ウィルデルスは、候補者のリクルートから議員の研修まで党運営を実務的に進めていくために「党内リーダーシップ」を発揮した〔水島 2016 : 151-157〕。

その結果、「オランダの誇り」は短命に終わり、自由党は生き残り、安定的勢力を築いている。右翼ポピュリスト政党が短命に終わらないためには、カリスマ的リーダーの存在やアウトサイダー的立場といったポピュリズムの「純粋性」を乗り越えて、党の「制度化」に取り組む必要がある。

メグレたちが参加するまでのFNには、そのような発想は欠けていた。周回的政党の時代は、堅実な組織化と地味な日常活動が求められる選挙活動は副次的な位置づけであったし、選挙で躍進した後も、「家業」として党を運営するルペンには、組織の整備と政策の体系化といった「制度化」という発想は希薄であった。党首ルペンと側近が集権的に運営する政党であり、ルペンが体现する反知性主義的体質が党を支配し、異議申し立て的な運動手法が支配していた政党にとって、信頼性と政権担当能力を重視する党の刷新は、ある意味で「文化革命」であった〔Crépon 2012 : 79〕。

その「文化革命」の担い手となったのが新右翼の流れを汲む知識人たちであり、彼らのもとで党の躍進に対応した党運営の抜本的な刷新、党の「制度化」が推進された。

FN 組織の整備－「まともな」政党へ

さて、組織化の具体的内容であるが、1988年の大統領選挙に向かってキャンペーン・チームが結成され、メグレがトップに座った。そのチームが選挙後に「全国代表部」へと改組され、メグレのもとでFNの組織整備に取り組むことになった。全国代表部は既存の全国書記局と競合する組織として発足したが、両組織は党組織の両輪として任務を分担した。全国書記局は、県連、財政、選挙といった分野を担当し、その任務に対応した8つの下部セクショ

ンが置かれていた。

全国代表部には、コミュニケーション、教育、研究、情宣、研修、示威行動、出版、社会への浸透などの分野が割り当てられた。全国代表部は理論、プログラム、戦略を策定し、FNの内外に広める活動を担う、いわばFNの頭脳ともいえる機関であった。そのような分野で、知的エリートである新右翼出身者が能力を存分に発揮したことは言うまでもない。

具体的活動を紹介しておけば、「全国研修研究所（IFN）」が設置され、FNの地方議員に研修が施されている。また、IFNは、大学教員による夜間講座、週末の幹部学校、各県での活動家研修、プレゼン技術の研修、FN夏期大学の開催といった多彩な任務を果たしていた（14）。

そのような組織の整備と並行して、FNの活動範囲を拡大し、市民社会に浸透するための組織づくりにも取り組まれた。地域での日常活動の強化と職業領域への浸透が重点的に進められた。日常活動の強化は、地域社会のなかで存在感のある政党を目指して、活動家に地域でのビラ配布やポスター貼りなどの活動を促し、そのためのノウハウを伝授するパンフレットが発行され、ビラやポスターなどの宣伝用のグッズも党中央によって提供された。職域組織については、銀行や教育、医療、農業などの職業分野で「全国サークル」が組織された他に、警察官や運輸従事者、刑務官などを組織したFN系の労組も結成された〔Dézé 2012：105-107〕。

こうして、政党としての基本的な組織が整備され、党機関紙の発行や警備担当組織の設置、専従有給職員の増員など、メグレたちのイニシアティブのもとで、FNは政党としての体裁を整えていった。そのような組織体制は現在でも基本的に維持されている。幾度かの選挙での低迷期や分裂を経験したが、それを乗り越えてFNは不死鳥のごとく蘇ってきた。その背景には、危機を乗り越えるFNの組織力があったことは明らかである。

（iii）イデオロギーの整備へー新しいFN像の提示へ

極右イデオロギーからの脱却

イデオロギーの整備についても、メグレたちのイニシアティブが発揮された。メグレたちは知識人であるだけに、政治にとって言葉のゲームが重要で

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (2)

あることを自覚していた。政治闘争のなかで意味をめぐる争いに習熟していた彼らは、FN に体系的なプログラムや一貫性のある言説を提供する必要性を理解していた。その具体的成果が、多様な政策分野での報告書の作成やプログラムの強化・充実であった。そのために、政策の立案と提案を担う機関として「研究・宣伝センター」、「議会行動グループ」「科学評議会」が設置された。

多くの報告書や党のプログラムが作成・出版されているが、そこには、批判だけではなく具体的提案ができる政党というイメージを FN に与えるという目的があった。J-Y・ルガルの下で「研究・論争」コレクションが編集・出版され、『フランスにおける外国人と失業』(P・ミロズ著)、『ミロズ報告-移民のコスト』(P・ミロズ著)、『教育』(O・ピション著)、『移民問題』(J-Y・ルガル, Ph・オリヴィエ著)などが次々と刊行されている。その他にも、『移民問題に関する50の方策』(1991年)、『社会的なものについて現状を分析するための51の方策』(1992年)といった FN が重視する分野での報告書、そして、『フランスのルネッサンスのための300の方策』(1993年)といった総合的政策集も発刊されている。

理論的・知的能力の誇示や政策提言能力の証明は、彼らの目標である「責任ある政党」、「政権担当可能な政党」に向かう不可欠の作業であった。説得力のある理念や政策によって支持者を動員できること、党員や幹部が共通のイデオロギーや言説を共有すること、反ユダヤ主義や歴史修正主義のような逸脱的言動を党内から排除することといった課題は、FN を「普通の政党」にするためには不可避であった。

何よりも、「脱悪魔化」のためにも党の理念や言説を説得力があり、抵抗感を与えない形で有権者に届けることが必要であった。既述のように、移民や外国人の排斥を「自国民優先」や「反フランス的人種主義」と言い換えることで、人種差別主義や排外主義の避難を回避することが追求された。「新右翼」が提唱してきた人種差別の非難を回避する「新しい人種主義 (差異主義的人種主義 *racisme différentialiste*)」のレトリックが利用されていた (15)。

また、信頼できる政治勢力と見做されるために、彼らは、これまで重視してこなかった政策領域にテコ入れすることも試みている。経済分野の政策を

強化し、国民生活の防衛や民衆層への配慮（社会的プログラムの強化）を強調することが必要だと考えていた。左翼が独占してきた社会的公正の神話を回収することで、FNは敵の陣営に手を突っ込むことに乗り出した [Igounet 2014 : 256-257]。

そして、イデオロギーと政策を整備・充実するだけでは十分ではないと、彼らは考えた。多くの有権者にFNのイデオロギーや言説や表現が理解され、受容されることが必要であり、そのためには、過激な表現を避けるべきだからである。有権者への浸透を考えたとき、彼らに余計な恐怖や不安を与え、嫌悪感を抱かせることを避ける必要があった。そのためには、過激な表現ではなく、抵抗感なく受容される言葉で伝えることも必要だと、彼らは説いていた [Igounet 2014 : 230]。

イデオロギーと言説の整備は、FNに新しいイメージを付与するためであり、有権者に違和感や抵抗感を与えない形で立論を行い、移民問題以外の課題にも対応できること示すことが心がけられた。政権に入閣して何人かの大臣を獲得することではなく、共和国の指揮権を握ることが目標であるとメグレは明言しているが、彼らが明確な目標を設定し、そこに向かって戦略的に党を刷新する意思を表現していた [Dézé 2012 : 108]。

それでは、メグレたちが推進したFNイデオロギーの充実・整備の内容は何であったのか。それによってどのようなイメージをFNに与えようとしていたのか。それはFNにとって大きな路線転換も意味していた。

新自由主義からの転換

1980年代のFNは新自由主義を政策の基調としていた。1980年代前半の躍進時には、商人や手工業者などの伝統的中間層が支持層に多かったこと、サッチャーやレーガン両政権に代表される新自由主義が時代の流れになっていたことから、FNは新自由主義の立場を採用していたと考えられる。

1984年に発表されたFNの政策的文書『フランス第一』は、新自由主義的立場から報道、教育、労働といった領域での自由を唱え、また、国家の介入を強く非難していた [Igounet 2014 : 151]。1985年に発表されたプログラム『フランスのために－FNのプログラム』にも、新自由主義的傾向が明確に

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (2)

表れていた [Front national 1985]。雇用政策では労働時間の短縮や公共部門での国家による雇用創出が否定され、産業社会の「宿命」である失業と闘うよりも共存することが説かれ、企業による解雇の自由化、労使による賃金の自由な決定、有期雇用やパート労働の拡大、労働時間の柔軟化、営業時間の自由な決定、退職年齢の自由化、職業斡旋事業への参入の自由化といった政策からなる「労働の解放」と、民営化、社会保険料負担や税金の面で企業が優遇されるフリー・ゾーンの創設、中小企業の育成といった「企業活動の自由化」を打ち出されていた。

社会保障については、現行の社会保障は負担が重く非効率であること、個人から責任感を奪っていること、官僚制のメカニズムが支配していることから、医療や社会保険の領域への競争原理導入と民営化が説かれている。その他、減税や財政支出の削減、国家の役割の縮小、労働組合の職場支配の打破を求めており、当時の FN は明らかに新自由主義に傾斜した立場をとっていた。

ところが、1990年代に FN は新自由主義的立場を転換して、イデオロギーと政策の方向性を大きく転換することになる。その背景には、既述したように、1990年代に入ると FN の支持者構造は大きく変化し、労働者や事務従事者、失業者といった民衆層が増加していったことが影響していた (16)。

そのような支持層の変化にともなって、FN は国家介入を肯定するようになり、民衆層の利益を擁護する立場に転換していった。FN は治安と移民に次ぐ第三の柱として、社会問題を設定するようになった [Igounet 2016 : 37]。1993年に発表されたプログラム『フランスのルネッサンスに向けた300の手段』が象徴的であるが、経済のグローバル化に警鐘を鳴らして保護主義的立場を鮮明にし、市場重視から国民の利益擁護に強調点を移し、「自国民優先」が前提ではあるが社会政策の実施を説いている。その他にも、自営業者の負債へのモラトリアム、障害者対策、最低賃金の保証、低賃金の改善、現行の労働時間とバカンスの維持、公務員の社会的地位の向上といった、これまでの FN とは異った政策が並んでいた [Front national 1993, 畑山 2007 : 114-115]。

1996年にメグレは『ルモンド』紙上で、「FN は社会的プログラムを発展

させ、革新的方法で社会運動を支えることを考えている。私たちは社会主義を実践することなしに社会的なものを創出することを望んでいる」と述べている [Collovald 2004 : 209] (17)。

FN は1980年代の新自由主義の立場から脱却し、社会的テーマに取り組み、民衆層の利益を擁護する方向に舵を切った。

「社会的右翼」としてのFN

1990年代のFN は社会問題を取り上げ、「社会的右翼」の色彩を強めていった。具体的には、解雇や企業閉鎖に関する情報をもとに企業や工場の前でビラ配りなどの活動を展開すると同時に、既存の労働組合への浸透やFN 系労組の組織化にも乗り出した。また、政策面でも社会的なテーマを積極的に取り上げている。

そのようなFN の変化は、時代の流れに対応したものであった。1980年代は、経済の新自由主義的改革が大きく進展した時代であった。市場重視や規制緩和、民営化、福祉の見直しが重視され、労働者や民衆層の生活と労働条件は執拗な攻撃に晒された。そのような状況は、1990年代に入ると、新自由主義改革の進行は労働者の反撃を引き起こした。1995年11-12月の長期ストライキに象徴される「社会運動のルネッサンス」「社会問題の復活」の時代が回帰したかのようであった。

そのような状況に敏感に反応したFN は、社会的な要求に配慮し、それまで敵視していた労働者の側に立ち、ストライキを支持する方向に転じた。経営難に陥った企業やリストラが進行中の産業部門をターゲットにして、グローバリズムの弊害を告発し、既成の労組がフランス国民を裏切っていることを糾弾した。前述のように、メグレたちはリストラを予定している工場に赴き従業員の解雇への抗議活動を展開した [畑山 2007年 : 98] (18)。

新自由主義的立場から脱却して、国家介入や社会保障、公共サービスを肯定する立場に転じたのも、「社会的右翼」への転換の一環であったが、1996年には「社会問題局」を設置し、FN が社会問題に本格的に取り組む姿勢を鮮明にした [畑山 2007 : 102-107]。

「社会的右翼」への転身の背景には、FN の労働者観の変化が作用してい

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(2)

た。新自由主義の立場をとる時期には、労働者や労働組合への冷淡な姿勢が際立っていたが、1990年代半ばから、「労働者の防衛」はFNの言説において一つのテーマとなった。1996年には、5月1日のジャンヌ・ダルク祭で、ルペンは、労働における公正と安全、自由の拡大を求める労働者と労働組合の長い闘いに敬意を表すると、発言している[Dézé 2012: 150-151]。

「社会的なもの (le social)」に関する強調も、「社会的右翼」への転換に対応して1990年代に始まっている。「社会的なもの、それはFN」といったスローガンが象徴しているように、「社会的なもの」を表出する役割の独占を目論んでいた。1992年に発刊された『社会的なものの現状分析に向けた51の手段』は、最初の社会的プログラムであり、ここでは貧困と闘うこと、労働の再評価、民衆所有の増進、家族の優遇、失業の抑制、社会的既得物の保証といったことが掲げられていた。そして、それらの手段が「自国民優先」のプリズムを通じて説かれること、それまでの新自由主義に好意的な姿勢を転換して「新しい保護主義」を擁護することも、この時期に始まっている[Dézé 2012: 150]。

ただ、FNの社会問題を扱う手法は左翼とは一線を画していた。極右政党にルーツをもつFNは、社会問題をナショナリズムと接合することで解決法を提示している。つまり、民衆の利益を国益と結合することで、FNはナショナリズムを基調としたポピュリズム政党へと脱皮を遂げることになる。その有力な概念装置が「自国民優先」というコンセプトであった。

「自国民優先」という処方箋

FNには、移民を敵視して排斥を唱える排外主義的・差別的政党であるという根強い批判が向けられてきた。それに対して、メグレたちが考案したのが「自国民優先」という非難回避の概念であった(19)。

CDHの出版した『フランスのアイデンティティ』では、国民のアイデンティティと主権を防衛するために、立法はフランス市民と外国人の待遇の区別を原則とすることが提案されている(20)。また、「自国民優先」の内容については、国籍法の改正(国籍取得の厳格化、出生地主義の廃止)、難民流入の制限、不法滞在や罪を犯した外国人の追放、失業した外国人の帰国、

教育や社会扶助、医療でのフランス人の優先といった主張が展開されている。そして、国民のアイデンティティや習俗、習慣、宗教的伝統を防衛することは「多様性 (diversité)」の擁護として肯定され、それを人種差別主義と同一視することを非難している [CDH : 1985 : 251-255]。

FNによると、移民に対する不利益な扱いは決して差別でも排外主義でもなく、不公正な現状を是正するために自国民を優先しているだけという論理になる。雇用と低家賃社会住宅への入居においてはフランス人を優先し、社会給付から外国人を締め出し、教育や職業訓練では外国人に対して割当制を導入することが求められている [Fourest et Venner 2011 : 198-200]。

結局、「自国民優先」の意味するところは、外国人が国民共同体の正規メンバーになることを制限することと、フランス国民 (EU 諸国民も含む) に外国人以上の権利を与えることである。逆に言えば、フリーライダーである外国人を福祉の恩恵から排除することを意味していた。つまり、雇用や公共住宅、社会的給付、職業訓練などの領域でフランス国民 (EU 諸国民も含む) を優遇し、移民を差別的に取り扱うことを意味している。それは、フランスの正規メンバー (= 国民) であるにもかかわらず、多くのフランス人が雇用や公共住宅、社会扶助などの面で移民よりも低劣な待遇に追いやられている現状への告発であった (21)。

また、「自国民優先」の概念は、「連帯」という共和主義の重要な価値を FN に回収する手段でもあった。FN は階級的視点から語られてきた「連帯」の意味を換骨奪胎して、「労働者の連帯」から「国民の連帯」に読み替えることで、「連帯」の言葉を自家薬籠中のものとした。1789年に発せられた「人権宣言」の人間という普遍主義の意味とは異なる、「国民」という閉鎖的で排他的な枠組みを前提とした「連帯」の主張が可能になった [La gauche forte 2014 : 16]。

つまり、「自国民優先」を唱える効用として、FN は「社会的右翼」として自己を提示することが可能となった。「自国民優先」の原則に沿って福祉や社会政策にアプローチすることで、FN は階級的視点からでなく社会問題に取り組むことが可能となった。これまで社会問題は左翼の十八番というイメージがあったが、社会政策の恩恵を国民共同体の正規メンバーに限定する

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(2)

ことでFNの土俵へと回収することができたのである(22)。

反グローバリズム政党としてのFN-EUという新しい対立軸

1990年代に入ると、FNはグローバル化への言及を強化し、反グローバリズムの姿勢を鮮明にした。メグレのイニシアティブのもとで、FNはグローバル化を中心的な争点として設定する。例えば、1992年には8名の大学人や弁護士たちが共同執筆した『グローバリズム－神話と現実』という小冊子が発行され、1998年には、メグレが『新しいヨーロッパ－フランスと国民国家からなるヨーロッパのために』という著書を出版している。1990年代に、FNは大々的にグローバリズム(とそのヨーロッパにおけるコロシアムであるEU)を批判する論陣を張っている。

「グローバリズムもしくはコスモポリタン主義は、20世紀末の中心的問題である」と先の著書のなかでメグレは書いている。経済から社会、文化までの多様な領域にグローバル化の影響は及び、階級なき社会というマルクス主義の理想に代わって、国民や人種、国境が存在しない「カフェオレのパラダイス」(=混淆のパラダイス)、人間と社会の現実を否定したユートピアが実現されようとしている。ゆえに、個人と国民共同体の自由を守ることを望む全ての人々にとって、今日の新しい主敵はグローバリズムであると、メグレは説いている[Mégret et al. 1992: 7-9](23)。

FNが反グローバリズム・反EUの立場を鮮明にするのは、1980年代から急速にグローバル化が進展し、1992年と2005年にはEU統合をめぐる国民投票が世論を二分するという状況を背景にしていた。マーストリヒト条約や欧州憲法条約案をめぐる国民投票では、既成政党では賛否が割れていた。左右の既成政党のなかから、欧州統合の現実に批判的な「欧州懐疑主義(Euroscepticism)」の動きが表面化する。伝統的な対立軸を超えて、新しい亀裂が政党システムに生じていた(24)。FNはグローバル時代の新しい対立軸を意識的・戦略的に利用していたのである。

既述したように、メグレたちの最大の目標はFNを極右政党から脱却させ、政党システムでの孤立から抜け出し、政権参加を実現することにあった。そのためには、左翼－右翼の二極対立図式を崩して、FNを軸として政界を再

編成する必要があった。これまで FN は移民問題を軸にしてエリートと民衆という対立図式で政治を解説することで、左右対立を超えた多数派形成を追求してきた。

そのような二元対立図式を国際政治の領域に転用して、FN はグローバル化を推進する「コスモポリタン勢力」と国家の主権と国益を防衛する「愛国主義勢力」という対立図式に組み替えた。メグレは「中心的な対立は、もはやマルクス主義的社会主義と自由主義的資本主義の間にはなく、コスモポリタン主義の支持者とアイデンティティの価値を擁護する人々の間に存在する」と述べているが [Fourest et Venner 2011 : 84], そこには、伝統的対立軸を新しいそれに置き換える意図が表れていた。

つまり、脱冷戦の時代に適応した新たな敵が設定されたのである。FN の敵は「コスモポリタンなイデオロギーによって支配されたエスタブリッシュメント」であり、左右の既成政党によってフランス社会のグローバル化が公然と進められていると FN は説いている [Igounet 2014 : 232]。既成政党は国民を裏切って「コスモポリタン勢力」に加担し、国民と国益の唯一の守護者は FN だけである。国民と国家をグローバリズムに売り渡す反国民的エリートと、それと果敢に闘う勢力というポピュリズム的な二元対立図式が描かれている。

また、反グローバリズムと反 EU のテーマへの傾斜は、FN の大きな思考の転換を意味していた。それは、新自由主義の擁護から批判へと大きく舵を切ることと平行であった。1992年から FN は「グローバリズムの推進」「自由貿易のユートピア」への批判を強めていき、雇用を防衛する「新しい保護主義」を称賛するようになっていた [Dézé 2012 : 150]。往年の新自由主義的な立場は影を潜め、産業空洞化と闘い、新しい保護主義への転換を求める「マリーヌの FN」の原型は1990年代に姿を現していた。グローバル化が本格化する時代に、左翼と保守の既成政党の政策が接近してオルタナティブが不在になった時代に、FN は国民国家の側に立ってグローバリズムと欧州統合と闘う政党として颯爽と登場してきた [Mandon 2001 : 32-33] (25)。

(4) 党の分裂と FN の危機

ルペンとメグレの対立

1995の大統領選挙ではルペンが15.26%を得票し、1997年の国民議会選挙ではFNは14.9%を集めている。同国民議会選挙では小選挙区制がゆえに1議席に終わったが、FNは15%内外の安定した集票力を示していった。だが、選挙での成功とは裏腹に、政界で孤立したFNには政権参加の展望は開けず、「体制のアウトサイダー」、異議申し立て政党として存在感を示すしかなかった。そのような状況を打破するため、メグレたちは保守中道勢力との連携を目指して党の刷新に乗り出した。だが、そのような選択は、党の独自性とアイデンティティに固執する勢力との対立を先鋭化させた [Dézé 2012 : 120]。

対立の主因は、メグレたちの党内での勢力拡大であった。イデオロギーと政策、組織の整備・充実に貢献したCDHの知識人たちは、次第に党内で影響力を築いていった。特に、全国代表部を拠点に地方組織の拡大・整備と地方議員の増強、自治体経営の重視、党員と地方議員への研修に尽力した結果、地方組織や地方議員のなかにメグレたちへの信頼と支持が高まり、メグレはルペンに次ぐNo. 2の地位へと昇りつめた。

メグレとは対照的に、ルペンはイデオロギーや政策の整備・充実にあまり熱意を示さず、異議申し立て政党の路線に満足しているように思えた。実践家、活動家であり、理論よりも感性やカンで勝負し、聴衆を沸かす弁舌とカリスマ的な人柄が売り物のルペンに対して、メグレは彼に欠けている側面を補っていたといえる。その意味で、相補的な役割分担に納まっている限りは問題なかった。だが、その相補性のバランスが崩れたとき、熾烈な内部対立が始まった。パーソナリティの違いや権力争いの要素も絡みながら両者の対立はエスカレートしていき、最終的にFNは深刻な分裂に行き着くことになった。

両者の対立にはいくつかの複合的要因があった [畑山 2007 : 128-134]。第1に、カリスマ的指導者であるルペンが党の指導権を争うライバルと共存できないことである。

1970年代に党内でルペンと指導権を争い、理論やイデオロギーの面で大きな影響力をもっていたF・デュプラが自動車の爆破事件で死去し、1980年代

にはFN躍進の立役者であり、ルペンの片腕であるJ・P・スティルボワも不審な自動車事故で死亡している。ルペンが暗殺の背後にいたとは言わないにしても、彼の党内支配の脅威となる存在が絶妙のタイミングで消えていったことは確かである。

党内のライバルを競わせることで、ルペンは支配権の維持を図ってきた。1988年にメグレを全国代表幹事に任命して全国書記長のスティルボワと競わせ、同様に1995年には、後にマリーヌのライバルになるB・ゴルニッシュを全国書記長に任命して、全国代表幹事のメグレと競わせた。2000年代には、ゴルニッシュとマリーヌを副党首に任命して競合させた。分割して統治するシステムによって、ルペンは競合するライバルたちの調停者の役割を果たし、強力なライバルが自らの地位を脅かすことを防いできた。FN内でメグレの影響力が過度に高まったとき力のバランスが崩れ、メグレはルペンの地位を脅かす強力なライバルとなった。分割統治のシステムが機能不全に陥ったとき、ルペンは自らの指導権を守るためにメグレたちの排除へと動いた。

第2に、ルペンとメグレの個人的次元での確執である。ルペンとメグレは対照的なパーソナリティと経歴の持ち主で、その違いが対立の要因になったことである。

ルペンはたたき上げの極右活動家で、性格は極めて陽気で快活、雄弁な演説で聴衆を沸かすカリスマ的指導者であった。他方、メグレはエリート養成の教育機関出身で元高級官僚、演説は決して上手とはいえず、冷静であるが面白みに欠ける性格であった。つまり、二人は資質も体質も対照的で、相互に欠けている点を補い利用し合っている間はいいが、対立状態に陥ると歯止めが利かなかった。

第3に、メグレたちはFNをルペン家の「家業」から近代的政党、組織型政党に改造することを望んでおり、対立の背後に両者の政党組織観の違いが横たわっていた。

1999年初頭の分裂に際して、メグレ派の幹部たちはルペンを頂点としたピラミッド型の組織構造を非難し、党財政の透明性と中央と地方での資金の再配分を求めた〔Turchi 2016 : 39〕。彼らは党の全国と地方の組織を整備・充実させ、議員研修を強化し、系列団体を整備することで、FNを近代的政

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (2)

党へと脱皮させようとしていた。そのようなメグレたちと、「家業」としてトップダウン型の前近代的な党運営を維持しようとするルペンとの間には深い溝があった。

その対立には、知識人エリートたちの合理的な発想に対する違和感も介在していた。ルペン派の J-C・マルチネーズは、「党内で権力を握ったエナとポリテクニク（国家行政学院と理工科大学校）の卒業生たちは、エリート学校で習得した彼らの思想、習慣、実践を党に持ち込んでいる」と批判しているが [Igounet 2014 : 290]、これまでの発想・体質とは異なったメグレ派のエリート的な思考法や実践への違和感が反発を引き起こしていた。

第4に、ルペンとメグレの確執は、党の路線と展望をめぐる対立を反映していた。

第4に、両者の間には、反体制の異議申し立て政党であることに安住するのか（ルペン派）、政権参加も視野に入れて「普通の政党」に脱皮するのか（メグレ派）という路線対立も横たわっていた。つまり、政党システムでの FN の孤立をめぐって、独自路線派と妥協派が対立していたのである。

対立の焦点は、保守勢力と協力して政治的な孤立状態を打開することにあった。そのためには言動の婉曲化・穏健化とイデオロギー上の妥協も辞さないメグレ派と、政治的独自性に固執して、党の基本的立場に執着するルペン派との間には非和解的な対立が存在していた [Džc 2012 : 104, Igounet 2014 : 306]。

「普通の政党化」によって政権参加も視野に入れた政治的シナリオは、ルペンが党首である限り決して実現できないことをメグレは理解した [Igounet 2014 : 189]。そうすると、FN を次のステップに進めるためには、ルペンから指導権を奪取するしかなかった。

最後に、ルペンとメグレの対立は、「マリーヌの FN」への前哨戦を意味していた。

1997年の党大会で、メグレ派は組織的に画策してマリーヌを中央委員会選挙で落選に追い込んだ。ルペンに割り当てられた20名の党首枠でマリーヌは救済されたが、党内の力関係はメグレ派が優勢であった。ルペンは政治局を拡大して「若返って強化されたチーム」への改組を打ち出し、その結果、10

名の中央委員が政治局入りを果たした。そこには、E・イオリオ、L・アリオ、M-CH・アルノチュといったマリーヌに近いメンバーが含まれていた [Rosso 2011 : 45-46]。マリーヌへのバックアップと見えるようなルペンの行動は、メグレたちとの確執に油を注ぐことになった。

対立がエスカレートするなかで、メグレ派の専従職員の解雇や地方幹部の排除といった強硬手段がとられ、メグレたちの党内拠点である全国代表部の廃止も提案されるなど [Igounet 2014 : 290]、両派の確執は全面戦争へと突入していった。

以上のように、個人的確執や路線論争など多くの要因が絡んで、両派の対立は不可逆点に達した。1999年1月、FNは二つに分裂するに至った (26)。

二つのFNへの分裂—深刻な打撃

ルペンとメグレの対立は党を二分する激しい党内闘争に発展し、やがてFNは2つに分裂する。分裂劇は人間関係を破壊し、党員の家族も引き裂かれ、大きな傷跡をFNに残した。マリーヌの家族も例外ではなかった。分裂騒動のなかで、長女マリー=カロリーヌは夫 Ph・オリヴィエとメグレ側に走り、ルペン家を去っていった [Marine Le Pen 2006 : 178]。

分裂に際して、党の幹部、議員、活動家、党員の奪い合いと、FNの名称や党章などの使用権をめぐる訴訟が起きた。最終的に裁判所はルペン側勝利の判決を言い渡した。党名やロゴなどの使用権を認められたルペンたちは、FNの「本家」としての地位を守った。また、政党助成金をどちらのFNが受け取るかも両者にとって死活問題であったが、裁判所はルペンの側に軍配をあげた。公費助成金はルペンのFNに支払われることになった。そのことで、当面は党財政は危機を脱することができた [Igounet 2014 : 344]。

1999年の欧州議会選挙は分裂後初めての全国規模の選挙であり、両陣営の将来を占う重要な試金石であったが、勝利したのはルペンのFNであった。FNは票を減らしながらも5.7%を得票し、5議席を確保した。一方で、メグレの「国民共和運動 (MNR)」は5%を割り込み (3.28%)、議席の獲得に失敗した。2002年の大統領選挙でも、ルペンは決選投票に残るという「快挙」を達成したが、メグレは2.34%の得票に終わった。2つのFNの争いは、

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(2)

決着が着き、ルペンのFNが生き残りに成功した。

激しい分裂騒動を何とか切り抜け、ルペンのFNは新しい世紀を迎えることができた。ただ、それを手放して喜ぶことはできなかった。というのは、分裂による影響が予想以上に深刻であったからである。

第1に、党のイデオロギーや政策、組織の整備・充実に取り組んできた多くの人材を失ってしまったことである。

J-Y・ルガル、F・タンメルマンズ、D・バリエ(Damien Bariller)、S・マルチネーズ(Serge Martinez)、P・ヴィアル、B・クルセル(Bernard Courcelle)など多くの知識人がメグレとともに離反していった。彼らの多くはCDH系の幹部で、エリート養成の高等教育機関出身の有能な人材であった。FNに知的装いと信頼性を与え、政権参画に備えるために党の刷新に貢献してきた人材を大量に失うことで、FNは近代的企業から小さな家族経営の企業に戻ったかのようであった[Fourest et Venner 2011: 392]。

第2に、党員や地方議員への研修などを通じてメグレ派は党組織に影響力を築ききたので、分裂の過程で大量の地方の幹部や首長、議員を失ったことである。

表3-3は、分裂によって党の役職や各級議員がメグレ派とルペン派に分かれた結果である。県連書記、中央委員会委員といった党の運営を担う幹部たちや欧州議会議員、地域圏議会議員、県会議員といった地方組織にとって欠かせない議員たち、党の看板である自治体の首長たち(オランジュ市長J・ボンパール、トゥーロン市長J-M・ルシュヴァリエ)が、メグレに従って党を去っていった。

その結果、とりわけ地方組織は悲惨な状況に陥った。三分の一に近い県連では政治活動は停止状態に陥り、県連の何人かの幹部とは音信不通になってしまった。県連の事務所には書記と妻、友人しか残らなかった例もあった[Rosso 2011: 132]。4万～4万5千名を数えた党員も半減し、分裂後は約2万名しか残らなかった。

また、人材難は選挙での候補者擁立にも波及し、その窮状はすぐには改善されなかった。2008年の市町村議会選挙に向けて全国書記長L・アリオは県連と地域圏組織の書記に回状を送っているが、そこには「フランスのための

運動（MPF）」（ドヴィリが率いる保守右派の政党）やメグレの MNR などから FN の候補者をリクルートすることが指示されていた。そこには候補者不足をカバーする意図が明らかで、分裂から10年近くが経過する時点でも、人材面で後遺症が残っていたことを示していた [Igounet 2014 : 412]。

表 3 - 3 FN 組織の役職と公選職におけるルベン派とメグレ派の分裂

	メグレ派	ルベン派
県連書記	58	38
地域圏議員	139	134
欧州議会議員	3	9
県会議員	3	5
市長	2	2
中央委員会被選出委員	46	54
中央委員会被任命委員	5	15

出典：[Delwit 2012 : 29]

党財政の危機

党の分裂は組織面だけではなく、党財政にも深刻な打撃を与えた。分裂による党員や議員の減少は党財政を直撃したが、選挙での得票の減少も政党助成金の減少として党財政に打撃を与えた。

例えば、2007年の国民議会選挙では4.3%という少ない得票に終わり、前回に比べて6.8%後退した。360人近くの候補は得票率5%を割り、選挙費用が償還されることはなかった。そのような選挙結果によって FN への公費助成は半減してしまった [Dézé 2012 : 132]。

党員の減少により、党費からの収入も3分の1に落ち込んだ。1997年から2000年にかけて、党費収入は910万フランから310万フランに減少している。その結果、FN の党財政は窮地に陥り、党の運営と宣伝の予算削減、三色旗祭りの中止、党機関誌『フランス人第1 (Français d'abord)』の発刊停止に追い込まれた。また、人件費削減のために専従党職員の半数も解雇せざるをえなかった。国民議会選挙の費用を賄うために銀行から融資を受けた750万ユーロなどで党の負債は900万ユーロに膨れ上がり、1994年から使っていたパリ郊外の高級住宅地サン＝クルーにある5000平米の党本部も売却に追い込

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(2)

まれた [Dézé 2012 : 132, Igounet 2014 : 344, 404, 413, Liszakai 2011 : 151]。

党本部は980万ユーロで売却され、党財政の立て直しに充てられることになった [Machuret 2012 : 145]。FN 本部はオー＝ド＝セーヌ県にある庶民的な大学都市ナンテールに移転したが、パリから遠く広さも半減した党本部は FN の苦境を象徴していた [Philippot 2011 : 47]。

更に弱り目に祟り目というか、FN は借金の返済を迫られたり、政治資金に絡んだ疑惑が投げかけられた。財政難の折に困ったことに、ルペンの旧友である FN の欧州議会議員 F・ル・ラシネル (Fernand Le Rachinel) は2007年国民議会選挙費用の大部分を貸し付けていたが、2008年初めに明細書を提出して3月31日までに返済することを要求した。返済を確保するために、ラシネルは党本部に対する保全措置をとり、1800万ユーロにのぼる FN への公費助成を差し押さえた [Liszakai 2011 : 149-150]。

他方で、2004-2007年に実施された選挙費用に関連して司法による告訴や調査が相次いだ。2008年2月にはノール県で公費助成に絡んで組織的な選挙費用の過剰請求、偽造請求書の発行による詐欺の疑いで司法調査が入った。リールでも3人の地方組織の幹部が投獄され、保釈金を払って釈放されているが、その件に絡んで、2009年4月にはリールの判事の監督下に15人の警察官がナンテールの FN 本部に家宅捜査に入っている [Liszakai 2011 : 152-153]。

生き残りに成功したが、人材難と財政難による党活動の停滞に FN は苦しむことになった。財政面での後遺症は、2011年1月にマリーヌ党首が誕生するまで続き、FN 存亡の危機が囁かれるほどであった [Dézé 2012 : 131]。

人材や組織、政治資金などの面で分裂の後遺症を抱えながら、ルペンの FN は1999年の欧州議会選挙を辛うじて乗り切り、新しい世紀を迎えた。2002年大統領選挙での予想外の健闘という幕間劇を挟んで、FN の低迷は続いた。だが、党にとって試練の時期は、同時に刷新と再生が準備された時期でもあった。

「メグレのFN」と「マリーヌのFN」

最後に、本章で「ルペンのFN」、特に、1990年代以降の党の刷新について紙面を割いてきた理由を確認しておこう。1980年代半ば以降、「新右翼」の流れに属する多くの知識人たちがFNに入党し、党の戦略、イデオロギーや言説、組織に及ぶ多面的な刷新に乗り出した、その意味で、この時期は、「新右翼」派のリーダーの名を冠して「メグレのFN」と呼ぶことにする。

FNの歴史において、この時期は重要な意味をもっていた。それは、多くの点で、現在の「マリーヌのFN」が「メグレのFN」を踏襲しているからである。その意味で「メグレのFN」は、「マリーヌのFN」の原型である。というのは、第1に、現在の「マリーヌ」のFNが追求している党の路線はこの時期に設定されたものを継承しているからである。異議申し立て政党に飽き足らず、政権への道を追求すること。そのためには、極右政党の急進的で過激なイメージを払拭し、「普通の政党」と見られるための戦略が展開された（「脱悪魔化」戦略）。

「脱悪魔化」戦略は、党の分裂後はマリーヌによって推進され、新党首に就任後もFNの「脱極右化」、「脱アウトサイダー化」の路線は一貫して追求されてきた。

第2に、党のイメージ転換のために、積極的に組織とイデオロギーの整備・充実が図られたことである。

「新右翼」出身ではあるがCDHに属する実務的で実践的な知識人たちは、効率的で合理的な組織へとFNをリニューアルすることにイニシアティブを発揮した。党首をトップにした中央集権的な効率的マシーンが整備され、選挙で威力を発揮することになった。また、彼らは党のイデオロギーや政策の整備にも乗り出した。政権政党を目指す以上はオールラウンドな領域をカバーし、かつ、説得力もある政策や言説の展開が求められる。そのような要請に応えるべく、メグレたちは急進的で非現実主義的な極右的なイデオロギー・言説・政策からの転換を図った。

次章では、マリーヌのもとで分裂の後遺症を乗り越えて党の刷新を更に進め、「マリーヌのFN」に向かうプロセスを追ってみたい。

注

- (1) 「ルペンの FN」については、[畑山 1997, 2007] で既に詳細に分析と考察を加えている。本章は、その点では初出の内容ではないが、「マリーヌの FN」との連続性を検証するために独立の章を設けることにした。
- (2) 1999年1月の分裂以降、2011年1月の党大会まで、公式的には党首はルペンであり「ルペンの FN」であるが、党首への就任以前からマリーヌは党内で重要な役割を果たしていた。その意味で、2011年以前から、事実上は「マリーヌの FN」になりつつあったと言えよう。
- (3) 議会と選挙という制度的政治の領域に乗り出した極右活動家たちであったが、合法的・制度的な変革が真の目的ではなかった。ドゴール主義とマルクス主義に対抗する第三勢力を政界に送り込むこと、真に革命的なナショナリスト政党を作り上げることが本当の目標であった [Igounet 2014 : 24-33]。政党システムへの参入と定着を追求するルペンとのその点で根本的な違いがあり、そこに党の対立と内紛の原因があった。
- (4) ユニークな極右系知識人であるアラン・ド・ブノワ (Alain de Benoist) に率いられた極右系の思想集団である「新右翼」は独特のイデオロギーと言説を展開しており、非常に興味深い思想集団であるが、本稿では FN の刷新に関係する限りで触れることにする。
- (5) 国民的基盤に立つ連帯を掲げる「ソリダリスト」は、急進的極右の潮流である「革命的ナショナリスト」に出自をもつ。1971年に「フランス・ソリダリスト運動 (Mouvement solidariste française)」が結成されている。ルペンの片腕として活躍した J・P・スティルボワはソリダリストに属していたが、1977年に仲間とともに FN に加入している。スティルボワは1988年の自動車爆破による死まで、党幹部として FN の躍進に貢献した [Lecœur 2007 : 273-274]。
- (6) ルペンは、FN が周辺的存在から脱出するためにはイメージ転換が必要だと自覚していた。ルペンとともに党を率いていた急進派のリーダーであった F・デュブラの死後、1980年代には、ルペンは FN に「尊重される党」というイメージを付与することを望み、親ナチスの友人たちと距離を取り、離党することを彼らに求めた [Igounet 2014 : 148]。これまで歴史修正主義や反ユダヤ主義と非難される逸脱発言を繰り返してきたルペンであるが、FN を「普通の政党化」する必要性については認識していた。
- (7) 実務能力に優れたルペンの片腕 J・P・スティルボワは、着々と FN の組織化を進めていた。1983年11月には全国で20の支部組織しか存在しなかったが、翌年4月には100に近づいていた。黨員も公称1万人を突破し、政党の体裁が整ってきた [Igounet 2014 : 150]。極右政党である FN が選挙で躍進するという新しい局面を迎えた背景には、政党としての基礎体力の強化があった。
- (8) 移民の争点化の成功と並んで、弁舌の才能を始めたルペンの個人的資質が FN の成功にとって大きな要素であったことは確かであり、ポピュリズム政党のリーダーの

資質と役割については多々論じられてきた。例えば、2002年の大統領選挙でルベンは決戦投票に進出するが、彼の堂々とした風貌や弁舌の才能、魅力は否定できない。とりわけ、弁舌の才能は他の候補に比べて際立ったもので、その創作力、ボキャブラリーの適格さと豊富さ、語りのリズムと多彩な声調、身振り手振りの巧みさといった点で比類なき存在であったと指摘されている [Manière 2002: 44-51]。

- (9) FN 支持層の「プロレタリア」化は、左翼支持層の「ブルジョワ化」に対応している。1988年の大統領選挙第1回投票で、労働者の41%、サラリーマンの40%、公務員の40%、管理職・知的職業の29%はミッテランに投票していたが、2007年の大統領選挙第1回投票では、労働者票の25%、サラリーマンの29%、公務員の29%、管理職・知的職業の25%と大幅に票を減らしている。民衆層や公務員での影響力の低下は大きく、社会党支持者の「ブルジョワ化」は明らかであった。社会党はもはや、民衆層の政治的代表ではなくなっている [Perrineau 2012: 82-83]。
- (10) 「新右翼」について詳細は [畑山 1997: 155-181] を参照。
- (11) メグレは保守勢力に影響力を与えようと共和国連合に加入したが、巨大政党では活躍の余地がなかった。小政党の共和党「共和主義行動員会 (CAR)」を経て、メグレは FN に行き着いた。RPR では果たせなかったことを、小政党 FN で実現することを期してであった。もちろん、メグレは FN が政党の体をなしていないことを理解していたが、メグレの夢見た大政党を作り上げるために、FN を変えるという野心に燃えていた [Igounet 2014: 173-174]。
- (12) メグレたちの意気込みに反して、1990年代の FN は極右の体質を色濃く残していた。1998年に開催された FN の祭典である「三色旗祭り」の風景が象徴的であるが、ナショナリストのバンドが音楽を奏で、多くの急進的極右の聴衆が聞き入っていた。歴史修正主義の書店がスタンドで書籍を販売し、そのオーナーが祭典の警備で積極的な役割を果たしていた [Igounet 2014: 296]。
- (13) FN が掌握した自治体では、「自国民優先」、反移民の方針に沿った補助金の分配などが問題となり、党内対立の影響もあって、初めての自治体運営は失敗してしまう。現在は、その時の経験を踏まえてか、より穏健で寛容な自治体運営がされている印象がある。1995年に誕生した FN 系自治体の運営の詳細については [畑山 1995a] を参照。
- (14) IFN の活動は党の知的・理論的水準、党員や議員の質の向上に貢献しただけではなく、その活動を通じて、メグレたちが地方の議員や幹部、活動家との関係を築く機会となり、彼らの党内での影響力強化にも貢献した [畑山 2007: 80-85]。そのことはメグレ派とルベン派の対立の伏線となり、1999年1月の党の分裂に帰結することになる。
- (15) FN はナチスのように生物学的に人種差別を正当化することなく、文化や伝統によって特定のエスニック集団の異質性や同化不可能性を根拠づけ、差別的待遇を正当化するという「新しい人種主義」=「差異主義的人種主義」を援用している。そのような論法は「新右翼」の「差異主義的人種主義」に由来しているが、人種差別の非難を回避する手段となった。生物学的に論証される人種間の優劣ではなく、異なった文化や伝統、習俗、宗教などをもった民族間の同化不可能性、差異の絶対性を根拠に移民への異なった

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(2)

対応、処遇が正当化されている。「差異主義的人種主義」については[畑山 1997: 183-210]を参照。

- (16) 1985年の大統領選挙で、ルペンは15.3%の票を集めているが、労働者層への浸透は顕著であった。選挙後にCSAが実施した調査では、労働総同盟(CGT)系労働者の7%、フランス民主主義労働同盟(CFDT)系労働者の6%、フランスキリスト教労働同盟(CFTC)系労働者の5%、フランス管理職組合(CFE=CGC)系の24%、労働者の力(FO)系労働者の16%がルペンに投票している。各労働組合中央組織についての数字をどう評価するかは微妙であるが、労働組合員の中でも一定の浸透を見せていることが分かる[Igounet 2016: 38]。ただし、念のために断っておけば、FNの強みは多元的な支持層に支えられていることであり、商人・手工業者、経営者、経営幹部、自由業など多彩な社会的カテゴリーを引き付けている。ただ、当初と比べて圧倒的に労働者、事務従事者、失業者がFNに投票していることは確かであり、その意味で「プロレタリア化」という言葉を使っている。
- (17) その発言を裏付けるかのように、1988年5月1日にはパリのオペラ広場でジャンヌ・ダルク祭を国民的で民衆の祭典として開催した。メーデーとして左翼によって独占されてきた5月1日を、FNは愛国主義と国民的連帯のシンボルにすることを訴えた[Igounet 2016: 37]。
- (18) 労働者や民衆の側に立つ政党への転身は、労働組合への浸透や独自のFN系労組の結成の労組の他にも、ホームレスや恵まれない民衆に食事を提供するボランティア活動にも取り組んでいる[畑山 2007: 104-105]。
- (19) といっても、「自国民優先」の発想はメグレたちのオリジナルではなかった。1980年に、ルペンは「経済危機が猛威を振るっているとき、フランス人労働者は優先権を享受すべき」と、同様の趣旨の発言をしている。また、1983年にラジオ番組に出演した際にも、ルペンは、移民問題への唯一の解決法は社会保障や金融機関、学校をフランス人に限定することだと発言している[Igounet 2014: 93, 144]。彼らの功績は、極右に共有されてきたエスノセントリック(自民族中心的)な発想を「自国民優先」というコンセプトに仕立てた点にあると言える。
- (20) つまり、FNはフランス社会を国民と非国民に二分して、国民共同体の正規メンバーに社会保障の恩恵を限定するという「福祉ショーヴィニズム」を唱えているのである。そのような考え方は、欧州で台頭している多くの右翼ポピュリズム政党に共通して見られるものである[中山 2016]。
- (21) FNの「自国民優先」という主張は、1990年代のFN支持層の考え方を反映していた。1993年に実施された調査では、FN支持層では移民・避難民の受け入れ停止(88%)、人種差別主義者と自己を認識(89%)、職場での外国人差別の肯定(51%)、異なったエスニシティ集団の共存が緊張を高める(67%)といった回答から、程度の差はあれ、国民共同体にとって異質な存在に対するFN支持者の排外主義的傾向が読み取れる[畑山 2007: 120]。ただ、そのような排外主義的で外国人嫌いの発想はFN支持層に限らず、国民のなかにも広く共有されていた。社会保障の恩恵を国民共同体の正規メンバーに限

定するという考え方は、FNの突出した主張ではなく、国民世論の中に強力な共鳴盤が存在していた。

2011年11月にFIOPが実施した調査では、回答者の81%が国民に愛着を感じ、80%が「連帯」という価値に愛着を持っていると答えている。そこから、国民のなかにも、福祉国家の恩恵を国民に限定する指向性が確認できる[Taguieff 2012: 107]。

- (22) FNは「自国民優先」を唱えるだけでなく、実際にその適用を追求していた。1986年の国民議会選挙は比例代表制で実施され、FNは35名の代議士を国民議会に送り込んだ。議会場で、1986-1988年にかけて、FNは63本の法案と多くの修正案を提出した。その中には、党の主要なテーマである「自国民優先」に基づく提案が含まれており、低家賃社会住宅への入居、家族手当、高齢手当などで外国人よりフランス人を優先することを求めている[Igounet 2014: 179]。
- (23) メグレたちの小冊子にはルベンが「あとがき」を寄せているが、そこでは「新しい保護主義(nouveau protectionnisme)」が提唱され、経済だけでなく文化、アイデンティティまで国家が防衛すること、そのためには国境を再強化することが説かれている[Mégret et als 1992: 113-114]。また、1998年にメグレが書いた著作では、欧州統合が経済、通貨、農業など多面的かつ徹底的に批判され、主権を保持した国家からなる連合体(une association de pays)、加盟や離脱が自由で、すべての領域で近隣諸国と協働するような新しいヨーロッパが現行のEU統合へのオルタナティブとして提唱されている[Mégret 1998: 284]。今日、「マリーヌのFN」もプロパガンダの核に反グローバリズム、反EUのテーマを据えているが、その主張の原型はこの時期にメグレたち主導のもとで形成されていた。
- (24) 1992年のマーストリヒト条約と2005年の欧州憲法条約案をめぐる国民投票で、保守中道政党(RPR, UDF)や社会党のなかから「欧州懐疑主義」に与する反乱が生じた。マーストリヒト条約は何と批准に漕ぎつけたが、欧州憲法条約は反対多数で批准に失敗している。フランスの「欧州懐疑主義」については、[畑山 2016]を参照。
- (25) グローバル化とEUのテーマは2017年の大統領でも重要な争点となっており、国民投票によるEUやユーロからの離脱というFNの主張に注目が集まった。グローバリズムと欧州統合の争点の重要性から、本論では独立した章を設けて詳述することにする。
- (26) メグレ派の党内での勢力伸長に危機感を高めるルベン派は反撃に出るが、ルベンの後継者争いも絡んで対立は泥沼の様相を呈した。その発端は、1998年の国民議会選挙期間中のルベンによる社会党の女性候補への暴力行為であった。裁判所によって2年間の公民権停止や執行猶予付きの3か月の禁固、2万フランの罰金といった判決を受けたルベンは、1999年の欧州議会選挙に立候補できなくなった。そこでルベンは、妻ジャンーをトップに据えたりストで選挙に臨もうとした。それを知ったメグレは憤慨する。というのは、ルベンが立候補できない以上、党のナンバー2である自分がトップに座るものと思っていたからである。そのような決定に、メグレはルベンのある意思、党首の座をメグレに禅譲する気がなく、終身党首にとどまるという意味を読み取っていた。これまで従順にルベンを補佐してきたメグレであったが、今回は大人しく引き下がらなかった。

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(2)

ルペンから党首の地位をもぎ取る決意で、メグレは立ち上がった。

それに対して、ルペンを先頭に反メグレ派は反撃に出た。欧州議会選挙に向けてメグレ派を締め出し、1998年7月15-17日にストラスブールで開催された党のセミナーで、反メグレの急先鋒である J-C・マルチネーズがメグレ派の拠点である全国代表部の廃止を提案した。反メグレ派に対する攻撃の口火が切られた。1998年11月18日には、メグレ派の活動家や専従職員の除名や解雇が発表された。そこから事態は一瀉千里に進行していった。12月に入ると、メグレ派幹部の党員資格の停止と除名、県連幹部の更迭が矢継ぎ早に発表された。それに対抗してメグレ派は臨時党大会の開催を要求し、それが容れられないとみるや独自の臨時党大会の開催に踏み切った(1999年1月24日開催)。分裂劇はここで大団団に至った。FNの分裂の詳細については[畑山 2007: 123-142]を参照。

参考文献

<日本語文献>

- 井出季彦(2009)『移民のフランスー「シテ」からみた大統領選挙ー』西日本新聞社。
- 植村邦(2002)『フランス社会党と第三の道』新泉社。
- 小熊英二(2012)『社会を変えるためには』講談社。
- 長部重康(1995)『変貌するフランスーミッテランからシラクへ』中央公論社
- シリネッリ, ジャン=フランソワ(川嶋修一訳)(2014)『第5共和制』白水社。
- 竹沢尚一郎(2011)「フランスにおける移民問題の複合性ーサンパビエと移民第二世代の視点から」, 竹沢尚一郎『移民のヨーロッパー国際比較の視点から』明石書店。
- 中山洋平(1999)「フランス」, 小川有美(コーディネーター)『国際情報ベーシックシリーズ EU 諸国』自由国民社。
- (2016)「福祉国家と西ヨーロッパ政党制の『凍結』ー新急進右翼政党は固定化されるのか?」, 水島治郎編『保守の比較政治学』岩波書店。
- 畑山敏夫(1995a)「『国民戦線』の自治体支配」『佐賀大学経済論集』第32巻第1号。
- (1995b)「フランス1968年5月ー政治的ユートピアの終焉」, 岡本宏編『1968年ー時代転換の起点』法律文化社。
- (1997)『フランス極右の新展開ーナショナル・ポピュリズムと新右翼』国際書院。
- (2007)『現代フランスの新しい右翼ールペンの見果てぬ夢』法律文化社。
- (2012)『フランス緑の党とニュー・ポリティクスー近代社会を超えて緑の社会へ』吉田書店。
- (2016)「フランスの『欧州懐疑主義』と『再国民化』」, 高橋進・石田徹編『再国民化』に揺らぐヨーロッパ』法律文化社。

- 藤巻秀樹 (1996) 『シラクのフランス－新ゴースト政権のジレンマ』 日本経済新聞社。
- 水島治郎 (2016) 「『自由』をめぐる闘争－オランダにおける保守政治とポピュリズム」、
水島治郎編『保守の比較政治学－欧州・日本の保守政党とポピュリズム』 岩波書店。
- (2017) 『ポピュリズムとは何か－民主主義の敵か、改革の希望か』 中央公論新社。
- 宮島壽 (2016) 『現代ヨーロッパと移民問題の原点－1970、1980年代、開かれたシチズンシップの生成と試練』 明石書店。
- モーリス・ラーキン (向井善典監訳) (2004), 『フランス現代史－人民戦線期以後の政府と民衆』 大阪経済法科大学出版部。
- 渡邊啓貴 (2015) 『現代フランス－「栄光の時代」の終焉、欧州への活路』 岩波書店。
- 吉田徹 (2011) 『ポピュリズムを考える－民主主義への再入門』 NHK 出版。

<外国語文献>

- Albertini, Pierre (1997), *La crise du politique. Les chemins d'un renouveau*, L'Harmattan.
- Amjahad, Anissa et Jadot, Clément (2012), "Le modèle organisationnel du Front national" dans Delwit, Pascal, *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.
- Club de l'horloge (CDH) (1985), *L'identité de la France*, Albin Michel.
- Collovald, Annie (2004), *Le 《Populisme de FN》, un dangereux contresens*, Éditions du Croquant.
- Crépon, Sylvain (2006), *La Nouvelle extreme droite. Enquête sur les jeunes militants du Front national*, L'Harmattan.
- (2012), *Enquête au cœur du nouveau Front national*, L'Harmattan..
- Delwit, Pascal (2012), *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.
- Dézé, Alexandre (2012) *Le Front national: à la conquête du pouvoir?*, Almand Colin.
- (2016), "Le changement dans la continuité: L'organisation partisane du Front national", *Pouvoirs*, no.157.
- Fersan, Henri (1997), *Le Racisme anti-Français*, L'Ancre.
- Fourest, Caroline et Venner, Fiammetta (2011), *Marine Le Pen démasquée*, Éditions Grasset & Fasquelle.
- Front national (1985), *Pour la France-programme du Front national*, Albatros
- (1993), *300 mesures pour la renaissance de la France*, Éditions nationales.
- La Gauche forte (2014), *Le Guide anti-FN*, Éditions L'ai lu.
- Igounet, Valérie (2014), *Le Front national de 1972 à nos jours*, Seuil.
- (2016), "La conversion social du FN, mythe ou réalité?", *Projet*, no.354.
- Lecœr, Erwan (sous la direction de) (2007), *Dictionnaire de l'extrême droite*, Larousse.
- Le Pen, Marine (2006), *À contre flots*, Grancher.

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線 (FN)」について考える (2)

Liszskai, Laszlo (2011), *Marine Le Pen. Un nouveau Front national*, Éditions Favre SA.

Mayer, Nonna (2012), “De Jean-Marie Le Pen à Marine Le Pen: l'électorat du Front national a-t-il changé?” dans Delwit, Pascal, *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.

Machuret, Patrice (2012), *Dans la peau de Marine Le Pen*, Seuil.

Mandon, Aurélien, *The Mainstreaming of the Extreme Right in France and Australia*, Ashgate.

Manière, Philippe (2002), *La vengeance du peuple. Les élites, Le Pen, et les Français*, Plon.

Mégret, Bruno et als. (1992), *Le mondialisme. Mythe et réalité*, Éditions nationales.,

——— (1998), *La Nouvelle Europe. Pour la France et l'Europe des nations*, Éditions nationales.,

Muxel, Anne (2012), “La tentation des partis extrémistes chez jeunes” dans Orfali, Birgitta (sous la direction de), *La banalisation de l'extrémisme à la veille de la présidentielle. Radicalisation ou dé-radicalisation*, L'Harmattan.

Ouraoui, Mehdi (2014), *Marine Le Pen, Notre faute. Essai sur le délitement républicain*, Michalon Éditeur.

Perrineau, Pascal (2014), *La France au Front*, Fayard.

Raynaud, Philippe (2016), “La nébuleuse intellectuelle du Front national”, *Pouvoirs*, no.157.

Rosso, Romain (2011), *La face cachée de Marine Le Pen*, Flammarion.

Simon, Jean-Marc (2011), *Marine Le Pen, au nom du père*, Éditions Jacob-Duvernet.

Sineau, Mariette (2012), “D'un Le Pen l'autre: l'image du Front national à la veille de la Présidentielle de 2012” dans Orfali, Birgitta (sous la direction de), *La banalisation de l'extrémisme à la veille de la présidentielle. Radicalisation ou dé-radicalisation*, L'Harmattan.

Taguieff, Pierre-André (2012), *Le nouveau national-populisme*, CNRS Éditions.

Turchi, Marine (2016), “L'Argent du Front national et des Le Pen. Une famille aux affaires”, *Pouvoirs*, no.157.